P.100
観光

P.108
コラム：日本で楽しむ台湾ガイド

P.110
台南

P.116
コラム：台湾に暮らして

P.118
鉄道

台湾観光

台湾に行きたーい！
—自分に合ったプランのつくり方—

— 案内人 —
前原志保

前原志保　まえはら・しほ
九州大学 人間環境学研究院 台湾スタディーズ・プロジェクト特任助教

高校卒業後、カナダの大学、イギリスの大学院を経て台湾大学国家発展研究所で博士号取得し現在にいたる。台湾には2004年から2014年まで10年間滞在。学術的専門分野はアイデンティティをめぐる政治、ジェンダー、博物館研究。台湾在住時に永康街付近で日本のガイドブック編集者に声をかけられ台湾の姿身写真のモデルを務めたことをきっかけに某有名旅行本の取材の手伝いや時事エッセイを書くようになる。自分の部屋で原稿や論文を書くのが苦手なため、地元でも台湾でも出張先でもインターネット環境が整っていておいしいコーヒーが飲める仕事が捗りそうなカフェをつねに検索して出かける癖がある。ここ2年、毎年数回長期で訪れていた台湾に行くことができなかったが、行くことができるようになったらすぐに台湾コスメ、台湾産のコーヒー豆、チョコレートを爆買いし、旬のフルーツを食べまくろうと企んでいる。

主な訳書

- 『蔡英文——新時代の台湾へ』白水社、2016年
- 『蔡英文自伝』白水社、2017年

いま、書店ではたくさんの台湾ガイドブックが売られている。軽いフットワークで台湾旅行の下調べをしようと本屋さんのガイドブックの棚の前に立ったあなたは、その選択肢の多さに少し焦ってしまうかもしれない。私が台湾に住むことに決めた2004年頃はその選択肢はとても少なくて、台湾に関するガイドブックは書店のアジア各国の旅行ガイド本を扱う棚の隅っこに追いやられていた。——というわけで現在の状況はとても喜ばしい。

台湾には2004年から2014年まで10年住むことになったが、日本から近いこともあって多くの友人たちが遊びに来た。私はその度に案内する場所を悩むことになる。とくに台湾に住み始めてずいぶん日がたってからは、いい意味でも悪い意味でも自分が「ローカル化」してしまい遊びに来てくれる友人たちが何を見て喜ぶのか、新鮮だと思ってくれるのか、果てはパクチー、臭豆腐、少々（ずいぶん？）辛い火鍋などが大好物な私に対し、彼らが何を食べておいしいと思うのかが正直わからなくなってしまっていた（いまは逆に日本に戻ってからかなり時間が経過したので当初の観光客的視点を取り戻している）。

日本からの台湾への旅の形もここ10年、徐々に変わってきている。以前は旅行会社お任せのプランで朝昼晩3食ついて、バスなどで観光スポットにドア・ツー・ドアで連れて行ってくれるような旅を選択する人が多かったが、1度目はそういうプランだったとしても、次は自分たちでプランをつくってみたいと思う人が多い。前置きが長くなってしまったが、今回はその2度目、3度目、もしくは最初から自分らしい台湾観光プランをつくりたい人向けのアドバイスをご紹介してみたいと思う。ポイントは4つ。1、台北以外の場所を旅行プランに入れる　2、自然をアクティブに楽しむ　3、そこに暮らすように旅をする　4、イベントやフルーツの旬に合わせて旅行計画を立てる、である。

1. 台北以外の場所を旅行プランに入れる

台湾旅行というと平均的に2泊3日が想定されるため、台北と、頑張っても台北郊外までとなりがちだ。でももし桃園国際空港を利用するならば、そのまま新幹線に乗って南に向かって欲しい。九州と同じぐらいの大きさの台湾、台中、台南、高雄なんて台湾の新幹線、台湾高速鉄道であっという間だ。各夜市の雰囲気や特色の違いに驚き、南のフルーツの圧倒的なおいしさに思わずにんまりし、青々とした熱帯気候の緑の豊かさに圧倒される。もし、「それはハードルが高いぞ」となったときには台北郊外、たとえば人気の観光スポット九份付近のB&Bに宿泊して、観光客がまだいない朝の風景を堪能する。温泉が有名な烏來、北投に宿泊するのもおすすめだ。2泊3日では難しいかもしれないが、台湾東部には西部にない美しい風景が広がっている。東京からの便で台北松山空港に降りて、そのまま国内線に乗り換えて台東や離島を訪れるというのもよいかもしれない。

2. 自然をアクティブに楽しむ

この案内を書くにあたってあらためてたくさんの台湾ガイドブックを読んでみたが、以前にも増して自然を楽しもうという提案が増えた。台湾をイメージするとき、台北の都会的な風景を想像する人も多い。しかしじつは台北市内でも自然を満喫できる場所はたくさんある。台北101や台北市の街並みが一望できる象山のトレッキングコース、陽明山へのハイキングからの日帰り温泉、レンタサイクルを借りて淡水河付近のサイクルロードを走るなど。台北郊外であれば、九份に行くついでに台湾鉄道の平渓線の1日乗車券を使って十份へ。駅から30分歩いたところにある台湾のナイアガラと言われる「十份の滝（十份瀑布）」を見たり、ランタンに願いごとを書いて飛ばす点燈上げ体験が楽しめる。猫好きであれば、九份の最寄り駅、瑞芳駅の隣駅の猴硐の猫村もいい。台北以外であれば、台中中心部からは少し離れているので訪れる時期にも注意をしてほしいが、「台湾のウユニ塩湖」と言われる高美湿地や花蓮、太魯閣国家公園の散策ツアー、澎湖島、台東もおすすめ。澎湖島は台北松山空港から国内線の飛行機で50分、さまざまなマリンスポーツが楽しめる。この島特産のサボテンの真っ赤なアイスクリームもぜひ食べてほしい。台東でもサーフィンやシーカヤックを楽しむことができる。このように「自然」をキーワードに旅行のプランを決めていくとまた新しい台湾の姿が見えてくる。

3. そこに暮らすように旅をする

このコロナ禍、台湾人の友人たちが日本に行ったら何をしたいかをSNS上で議論しているのを見ていた。そして多くの人が、「とりあえず日本のコンビニに行きたい」と書き込んでいたことに驚いた。台湾にもコンビニがあふれかえるほどあるのに。でも気持ちはわかる。海外生活が長かった私も日本に戻って最初に向かうのはコンビニだった。きっと日本旅行に慣れている台湾人たちも日本のコンビニに行って「ああ、日本に（戻って）来たのだ」と実感するに違いない。旅慣れした彼らは、もはや日本に暮らすように旅をしている。

というわけで、3つ目のおすすめは一見台湾っぽくないものを食べてみる、そこでもし生活していたとしたらどんな感じなんだろうと考えてプランをつくってみるというものだ。もちろん台湾で食べるべきものは短期滞在では間に合わないぐらいたくさんある。小籠包、豆乳や揚げパンの朝ごはん、素食と呼ばれるベジタリアン料理、火鍋、台湾唐揚げ鶏排（ジーパイ）、黒糖タピオカミルクティーに、牛肉麺、数え上げればキリがない。しかしこの台湾を離れていた2年とちょっとの間、台湾定番のそれらと同じぐらいの熱量で私が食べたかったものは、通いつめていた行きつけのカフェの新鮮なフルーツがたっぷり入ったフルーツティー、フルーツとカスタードクリームがてんこ盛りの焼き立てワッフルの朝ブランチ、東南アジア系の新住民がつくるベトナムのサンドイッチ、バインミーやタイ系華僑のつくる丸々1匹のカニが入ったプーパッポンカレー、シンガポールで有名な海南鶏飯だったりした。台湾に来たから中華料理、台湾料理を食べなくちゃ、じゃなくてもいいのではないだろうか。台湾は多文化社会でさまざまな文化的背景を持った人たちが暮らしている。だからこそ、その恩恵を受けてみるのも旅の醍醐味だ。

また、最近は観光客の「モノ消費」よりも体験型の「コト消費」に重点が向けられているという。そこに暮らすように旅をする、たとえばホテルではなくairbnbなどを使ってアパートメントに滞在してみるのもいい。「コト消費」としては定番の写真館での姿身写真の撮影、占い、足裏マッサージ以外にも、観劇やコンサートに行く、台湾でお料理を習ってみる、中国語の語学学校に行って学生の気分を味わうのもいいと思う。

4. イベントやフルーツの旬に合わせて旅行計画を立てる

多くの人が知っているように台湾はフルーツ大国だ。年間を通じてさまざまなフルーツが安価で食べられるが、とくに6月頃から旬が始まるマンゴーとライチは外せない。マンゴーは比較的長い時間市場でも購入することが可能だが、ライチの旬は短いのでその時期に合わせて行くしかない。また、マンゴーは台北で食べるものも十分においしいが、台南観光を楽しむついでにバスに揺られてマンゴーの聖地と言われる玉井まで出かけるのもおもしろい。日本でも路線バスの旅に関する番組が人気だが、玉井までの道のりも熱帯の景色がのんびり楽しめてよい。

イベントでは、有名なところで大晦日の台北101カウントダウン年越しイベント、旧暦1月15日の元宵節のランタンフェスティバルは旅行時期を合わせて見に行く価値がある。

以上、4つの提案をご紹介させていただいた。あなたらしい「台湾の旅」のヒントとなれると嬉しい。

『美味しい！　可愛い！ 大人の台湾めぐり』

竹永絵里

産業編集センター　2020年　¥1,430
ISBN：9784863112544

2010年に初めて台湾に行って以来、毎年訪れている「台湾沼」にどっぷりはまってしまったイラストレーターの竹永絵里さんがおすすめするイラスト旅案内。台湾を旅していて、「あれ？　なんだろう？」と気になること、地元の人に交じってやってみたいけれど実際どうしたらいいのかわからないさまざまなことについての詳しい説明が書かれている。

たとえば、台北では多くの人の旅行プランに入っている龍山寺、行天宮などの廟。実際に行ってみるとおみくじの引き方やお参りの方法を知りたくなるはずだ。そのほかにもツアーで行くことが多い九份へ個人で行く方法、十份での「ランタン上げ」、地元の人であふれかえる朝ご飯屋さんや小籠包屋さんでの注文方法、夜市で見かけるエビ釣りやクレーンゲームの遊び方など、日本人が台湾旅行でチャレンジしてみたい「ツボ」を押さえた情報が掲載されている。

お買い物に関しても竹永さん自身の経験にもとづいておすすめが書かれており、そのチョイスはさすが台湾旅行のリピーターさん。ちなみに迪化街での干しエビや美しいリボン、ドラッグストアでのデンタルフロスや小分けのコンタクト液などは私も必ず購入するものだ。またこの本で驚いたことは、行天宮での「収驚」という私が日本帰国前に必ず行なう儀式について書かれていたことだ。行天宮を訪れたことがある人は、お線香を持った青い服の人の前に参拝客がものすごい行列をつくっているので、あれは一体何をやっているのだろうと気になったと思う。「収驚」とはこの本にも書かれているが、「日常生活の中でびっくりする場面に遭遇してしまったり、疲れが溜まっていたり、元気がなかったりするときに、抜けていた魂を自分の体に戻す」儀式。私は最近ついていないと感じるときやこれからまた気合を入れ直して頑張るぞと思うときに行っている。中国語で名前と生年月日を伝えるのは、少しハードルが高いかもしれないが、無料なのでぜひチャレンジしてみてほしい。

『台北　オトナ女子のすてきな週末』

ときめく台湾の楽しみ方70

グレアトーン台湾編集部

メイツ出版　2018年　¥1,705
ISBN：9784780419771

台北とその近郊の紹介がメインではあるが、より台湾感を味わえる台中、台南、高雄についても少ないページ数ではあるがおすすめスポットが掲載されている。コンセプトは「心ときめく台湾の70の楽しみ方の提案」。その方法は一般的な台湾ガイドブックより少し個性的で、地元に密着している。台湾旅行に初めて行く人と言うより、どちらかと言うと普通の台湾ガイドブックには飽きたぞというリピーター、穴場を探す人向けの本で、日本人観光客が1回目の台湾旅行では選ばなそうなアクティビティやローカルすぎるレストラン情報を掲載している。とにかくとことんマニアックな印象だ。どのくらいマニアックなのかというと、この本には台湾の郵便の歴史を紹介する台北郵政博物館や紙の文化を伝える樹火紀念紙博物館、ミニチュアアートを展示する袖珍博物館などの紹介はあっても、台湾のガイドブックに必ず掲載されている故宮のことは書かれていない。小籠包で有名な鼎泰豊の記載はないし、衛兵交代式で有名な中正紀念堂も、その建物自体の紹介ではなく、その外周がランニングコースとしておすすめされていて、2月に高雄で、12月に台北で行なわれるという国際マラソン大会の情報まで掲載している。また、台湾の遊園地、動物園、本格的なエビ釣り場、台北市の東側にある標高185mの象山トレッキングコースから見る夕陽や台北101、温泉で有名な烏來ではなくその近くにある碧潭で乗るスワンボートなど、子ども連れの家族に向けた情報も充実している。本のタイトルには「オトナ女子」とあるのだが、実際は男女を問わない。紹介されているおすすめスポットの何個かは公共交通機関を使ったとしてもなかなか不便な場所もあるが、1日であちこちを回るつめ込み型ではない一点集中型の旅を考えている方におすすめできる。

台北でカフェを経営している台湾人女性アイリーンさんのとてもパーソナルな台湾おすすめリスト。どちらかと言えば台湾に何度も通っていて、観光地的なものには飽きてしまった方におすすめできる本である。私は台湾に住んでいた頃、某ガイドブックの制作のお手伝いをしていたのだが、本に掲載する情報を選択するとき、リアルに自分がおすすめできるか否かというより、その本を持って台湾にやって来た人が容易に公共交通機関を使って目的地にたどり着くことができるかどうか、中国語ができなくてもレストランのメニューや商品などに日本語表記や写真がある、もしくは日本語がわかる店員さんがいるなど親切であるか否か、お店やその施設の休日が店主の都合に合わせて不定期ではないかなどの要素を重視していた。というわけで、そのような掲載までの「ハードル」をあまり考慮せず、著者アイリーンさんのお店・場所選びのチョイスに全信頼を置いた本書には大変好感が持てた。食べ物を紹介するにしても、「普通の、平均的な」ガイドブックであればいわゆる写真映えはもちろん、日本人はこの味や香りが苦手なんじゃないかなどと先回りして考え紹介するメニューを決めたりするものなのだが、彼女はありのままのおすすめを載せている。だから当然「映え」ない食べものもたくさん登場するのだが、逆に信頼できると思う。

また、この本で特徴的なのはメイド・イン・タイワンの素敵な食品、雑貨、化粧品などの紹介とともに、そのプロダクトが生まれたストーリー、そのお店のオーナーの人柄や信念などを紹介しているところだ。自分がいままで訪れたことがあるお店も何軒か紹介されていたが、商品開発のストーリーやオーナーさんの信念をこの本で知ったことにより次に訪ねるのがとても楽しみになった。この本で紹介されているものはもしかしたら友だちに配るのに便利なお土産の情報ではないかもしれないが、自分のための「オンリーワン」のお土産を見つけるヒントになる。

『台湾女子の私的行きつけリスト』

ビューティ、ファッション、雑貨、グルメ、カルチャー……地元っ子が本気でおすすめするならここ！

アイリーン・クゥオ

誠文堂新光社　2018年　¥1,540
ISBN：9784416618417

この本は台湾への旅行に持って行くものではなく、山口県の中の台湾を探す道標本だ。コロナ禍で台湾へ行けなくなったこの2年ほどの間、いままであたりまえのように日台間を行き来できていたことがいかに幸運だったかを知るとともに、自分の中の「台湾不足」を補うために日本の中にある台湾の「面影」を探した人も多いのではないだろうか。著者の栖来ひかりさんは山口出身の文筆家で、この本は彼女が台湾で最初に出版した『台湾、Y字路さがし』（玉山社）を書く際、台湾という場所の歴史背景などをいろいろと調べるうちに山口県と台湾のつながりの多さに驚いたことから生まれた。この本に書かれた山口県と台湾にまつわるお話は、山口のお隣福岡県出身の台湾研究者の私もほとんど知らないことだらけで驚かされた。知ったからには現地に行ってみたい、そう考えた私は、今年の3月にこの本を片手に学生たちと山口の中の台湾を探す旅に出る機会をえた。山口、萩、周南、周防大島などを主に回ったのだが、台湾というキーワードを頭に浮かべながら山口を回ると、いままでとは違う風景が見えてくる。たとえば、萩、吉田松陰の妹、壽（ひさ）はのちに群馬県の県令（当時の知事）を務めた楫取素彦と結婚をしたのだが、その次男楫取道明は台湾が日本の植民地となった1895年に台湾に渡り、台湾で初めてつくられた日本語教育機関芝山巖学堂で子どもたちの指導に当たっていた。彼はのちに抗日派住人の襲撃を受けて惨殺される。彼の評価は日本統治時代、国民党政権下とまったく異なっているが、いま現在は学堂の跡地が史跡として整備され、当時いっしょに殺されてしまった先生たちとともに「六氏先生」と呼ばれている。私はその旅で、台湾にあるとばかり思っていた楫取道明のお墓がじつは毛利家の菩提寺である東光寺にあることを知り、お参りする機会をえた。この本を通じてメインストリームではないかもしれない台湾の歴史を学び、山口の人々と台湾とのつながりを学び、そして世界で侵略戦争が起きてしまった2022年にあらためて台湾の日本統治について深く考えることとなった。

『台湾と山口をつなぐ旅』

栖来ひかり

西日本出版社　2018年　¥1,650
ISBN：9784908443398

『台湾旅人地図帳』

台湾在住作家が手がけた究極の散策ガイド

片倉佳史、片倉真理

ウェッジ　2019年　¥2,200
ISBN：9784863102187

台湾と言えば台北旅行がメインと思われがちだが、最近では台北以外の大都市や地方都市の魅力にも注目が集まっている。本書では、台湾在住20年の作家夫婦、片倉佳史と片倉真理が、約80のエリアやスポットを丹念に取材し、詳細な地図とおすすめコメント、写真とともにオールカラーで紹介。台湾のメジャー都市だけではなく、地方の魅力ある都市や離島も歩けるように詳細な地図と写真を掲載するガイドブック。

『散歩の達人 台湾さんぽ』

台湾西部6つの街 ヌクユル旅ガイド

旅の手帖MOOK

交通新聞社　2019年　¥1,210
ISBN：9784330004198

東京から飛行機で3時間、暮らす人々のメンタルは日本人に近く、日本統治時代に歴史を共有したせいか、古い街並みが妙に懐かしい。テーマは、もしも雑誌『散歩の達人』が台湾特集を組んだら――。小籠包もマンゴーかき氷も有名観光地もあまり登場しない、歩いて楽しい街を、生活に根ざした散歩目線でさまよえるよう編集された、“普通のガイドブック”とは一線を画す万事が『散歩の達人』流な台湾ガイド。

『もっとオモシロ はみだし台湾さんぽ』

奥谷道草

交通新聞社　2018年　¥1,430
ISBN：9784330864181

前著『オモシロはみだし台湾さんぽ』(交通新聞社、2015年)につづく、有名観光スポットには食指が動かない人に向けた台湾散策の手引き第2弾。定番の観光コースを大きくはみだし、舞台は台湾中南部。アートと美食にほどよく長けた台中を中心に、台南、高雄、嘉義、岡山の5つの街の楽しみ方を提案する。普通のガイドとはひと味違う、足で稼いだ、ややディープな台湾さんぽ。

『FAMILY TAIWAN TRIP #子連れ台湾』

田中 伶

地球の歩き方　2019年　¥1,518
ISBN：9784058015346

台湾の魅力を発信する人気メディア「Howto Taiwan」。一児のママであり台湾をこよなく愛する編集長の田中伶が、子連れ旅行者に絶対おすすめしたい155軒を紹介。年齢別の過ごし方や話題の体験型スポット、安心して楽しめるグルメ情報などを凝縮。現地在住&台湾好きママのクチコミも多数掲載。

『台北歴史地図散歩』

古地図と写真でたどる台北の100年

中央研究院デジタル文化センター・訳／森田健嗣・監訳

ホビージャパン　2019年　¥2,640
ISBN：9784798619057

台湾で人気を博したベストセラー書籍『台北歴史地図散歩』の日本語版。台北の歴史と文化、街の移り変わりを、200枚以上の貴重な記録写真や古地図でたどる。カバーイラストは、『制服至上台湾女子高生制服選』(マイナビ、2014年）で台湾のみならず日本でも大人気のイラストレーター・蚩尤(しゆう)が担当。連動アプリを使えば、実際に台北の街を歩きながら過去の街の姿をスマートフォンで見ることができる。台湾旅行のおともにおすすめの1冊。

『台湾へ行こう!』

見えてくる日本と見えなかった台湾

藤田賀久

えにし書房　2018年　¥2,420
ISBN：9784908073571

日本を再発見し、真の台湾に出会う知的旅行のスタディーツアーガイド。台湾のいたるところに「日本」がある。また、日本からは見えない台湾がある。日本統治時代の歴史をふまえながら、変貌する台湾のダイナミズムを感じ、新たな気づきと知見を得るためのガイドブック。

こんな本もございます 旅 紀伊國屋書店

『台湾観光　ツアーバスでいこう!』

おがたちえ／台北ナビ・監修

ぶんか社　2018年　¥1,222
ISBN：9784821144785

いまや日本人の人気旅行先ナンバーワンになった台湾。台湾の交通部観光局が旅行業者と連携した、日本の「はとバス」的な観光バスツアーを使って、首都・台北のみならず人気の台中、台南、高雄のツアーに参加し、個人旅行では行きづらい観光地をめぐる旅のレポートを紹介。台湾情報サイト「台北ナビ」の全面協力。現地情報の解説ページつき。

『はじめまして、東台湾。』

矢巻美穂

スペースシャワーネットワーク
2018年　¥1,760
ISBN：9784909087270

「こんな台湾、見たことがない」。絶景スポット、カフェ＆食堂めぐり、原住民の文化にふれる旅――。国内、海外の旅行雑誌を中心に活動するカメラマンによる、大自然と原住民の街、台東・花蓮のパーフェクトガイド。現地で役立つ二次元バーコードつき。

『わたしの台湾・東海岸』

「もう一つの台湾」をめぐる旅

一青 妙

新潮社　2016年　¥1,320
ISBN：9784103362722

豊かな自然と先住民文化に彩られた、あなたの知らない魅惑の台湾がここにある。先住民が多く、台湾人に心の原点と愛され、アウトドアレジャーも盛んな台東。名所・太魯閣渓谷や日本統治時代の建物を活かした街が人気の花蓮。テレビドラマ「孤独のグルメ」でも紹介され、台北から近い宜蘭など。都市が集まる西側、古都として人気の台南ともまるで違う東海岸独特の魅力を、日台ハーフの著者が綴るガイド＆エッセイ。

『台湾市場 あちこち散歩』

池澤春菜

角川書店　2019年　¥1,650
ISBN：9784041084304

大小さまざまな台湾の「市場」を端から端まで紹介するガイドブック。絶品グルメからオンリーワンの雑貨まで、美味しいもの、新しいものが楽しめる寧夏夜市、華西街夜市など、台北の11の市場と周辺スポットをカラー写真とともに紹介。食べるだけでなく、買う、試す、写真を撮る、すべての楽しみを求める台湾旅行者におすすめの1冊。

『本の未来を探す旅 台北』

内沼晋太郎、綾女欣伸・編著／山本佳代子・写真

朝日出版社　2018年　¥2,530
ISBN：9784255010847

韓国空前の本屋ブームを取材し、出版新世代に話を聞いた『本の未来を探す旅　ソウル』(朝日出版社、2017年)。次の行き先は韓国同様、若い世代が新しく本屋を立ち上げては自力で出版社を始めている台湾・台北。いま、東アジアで同時多発的に起こっている「独立」のムーブメントは、いったい何を意味し、この先どこへ向かうのだろう。書店主や編集者やブックデザイナーなど、台湾の出版文化を牽引する新世代31人にじっくり話を聞いた。

『美麗島紀行』

つながる台湾

乃南アサ

新潮文庫　2021年　¥649
ISBN：9784101425603

美しき、麗しの宝島、台湾。数奇な運命をたどったこの島に魅了された作家が、丹念に各地を歩き、人々と語り合い、ともに食べ、その素顔に迫る。日本人の親友の妹と結婚した考古学者、日本統治下時代を「懐かしくて悔しくて」と語る古老、零戦乗りを祀る人々。彼らの面影には私たちが見失った私たち自身の顔も浮かび上がるのだった――。歴史と人に寄り添った、珠玉のような紀行エッセイ集。

『美麗島プリズム紀行』

乃南アサ

集英社　2020年　￥2,090
ISBN：9784087816969

近くて遠い、台湾の本当の姿を求めて、歴史と人に寄り添う台湾紀行。台湾各地を歩いて歴史をひも解き、さまざまな人と出会いながら、旅の途上で湧き上がる心情を綴っていく。前作『美麗島紀行』（集英社、2015年）から5年、台湾への興味と愛は尽きることなく、著者自身が撮影した数々の写真とともに、台湾の多彩な側面に迫る。

『旅ボン 台湾・高雄編』

ボンボヤージュ

主婦と生活社　2019年　￥1,430
ISBN：9784391152746

自称ひきこもりイラストレーターがやや強引に旅に連れ出され、その体験をコミックエッセイに仕上げる「旅ボン」シリーズの台湾編、第1弾。台北到着後からさっそくタピオカ――、ではなく駅弁を買い込み、台湾新幹線で一路高雄へ。瑞豊夜市、蓮池潭、龍虎塔、旗津などなど、ひたすら食べて歩いてさまよう旅の記録。

『旅ボン 台湾・台北編』

ボンボヤージュ

主婦と生活社　2020年　￥1,430
ISBN：9784391153774

役立つ情報はほとんどないが、きっと旅には出たくなる。それが「旅ボン」のコンセプト。台湾編の第2弾は、台北市を中心に、九份、十份、士林夜市に城中市場、ローカル電車や小籠包のはしご食べ、台湾シャンプーに牛肉拉麺、臭豆腐などなど、「台湾と言えば！」なぜ・観光地をめぐる。

『台湾の秘湯迷走旅』

下川裕治／広橋賢蔵・案内人／中田浩資・写真

双葉文庫　2020年　￥858
ISBN：9784575714869

温泉大国の台湾。日本人観光客にも人気が高い有名温泉のほか、地元の人でにぎわうローカル温泉、河原の野渓温泉、冷泉など種類も豊か。超のつくような秘湯も谷底や山奥に隠れるようにある。水先案内人である台湾在住の温泉通と日本から同行したカメラマンとともに、車で超秘湯を目指すことになった著者。ところがそれは、想像以上に過酷な旅の始まりだった。台湾の秘湯をめぐる男3人の迷走旅。紀行とともに温泉案内「台湾百迷湯」収録。

『美麗島・台湾自転車紀行』

神谷昌秀

ブイツーソリューション
2018年　￥1,430
ISBN：9784434245466

自転車で台湾各地をめぐる、台湾自転車紀行。日本に紹介されていない台湾各地の知られざる観光スポットや環島（台湾一周）、東アジア最高地点（武嶺）、台湾横断、美しい東海岸などを豊富な写真も含めて紹介する。環島1号線や各地の自転車道、素晴らしい台湾の自転車環境をはじめ、台湾と日本のかかわりや歴史、なぜ親日なのかなど、台湾旅に必要な情報なども紹介。

『台湾物語』

「麗しの島」の過去・現在・未来

新井一二三

筑摩選書　2019年　￥1,650
ISBN：9784480016812

旅行先として日本人に人気の台湾だが、ガイドブックに載る情報以外のことは、じつはあまり知られていない。歴史、ことば、神様、建築、地名、映画、そして台北、台中、台南などの街――。ガイドブックよりも深く台湾を知りたい人のために、台湾でも活躍する日本人作家が語る、この島と人々の昨日、今日、明日の物語。

こんな本もございます 旅 紀伊國屋書店

『台湾 百年ストーリー』

20の物語に出会う旅

横山 透

辰巳出版　2019年　￥1,320
ISBN：9784777822737

台湾には、日本から急速に姿を消してしまった大正・昭和時代の建物、家屋がいまも各地にたくさん残り、古い建物、家屋を修復し、再利用する試みが官民を挙げて行なわれている。歴史的建物を文化財として眺めるのではなく、その中で時間を過ごし時の流れに身を委ねる感覚や、古い建物に新風を吹き込む台湾の人々の大胆な発想や力強さ、新旧が交錯する国・台湾のおもしろさを伝える。

『台湾見聞録』

日本が残した足跡を訪ねて

時空旅人ベストシリーズ

三栄　2019年　￥946
ISBN：9784779639456

台北の日本統治時代現存建築物、台南の鄭成功の遺徳、屏東の北原白秋を魅了した三地門郷――。観光情報やグルメ情報が中心のガイドブックとはひと味違った、台湾に残る日本と関係の深い歴史的建築物や場所などをめぐる1冊。李登輝のインタビューや、戦前から現代にいたる激動の台湾史、秘蔵写真で見る若き昭和天皇の足跡なども収録する。『時空旅人』Vol.45（三栄、2018年）を加筆し再編集。

『台湾訪日旅行者と旅行産業』

インバウンド拡大のためのプロモーション

鈴木尊喜

成山堂書店　2019年　￥2,860
ISBN：9784425929016

台湾人のインサイトを各種意識調査や歴史的背景から分析し、台湾現地の訪日旅行産業を理解することで、これからの台湾訪日旅行者への対応、現地旅行会社との接触手法、効果的なプロモーションのあり方などを考察する。日本のインバウンド研究者や事業関係者必読の1冊。

『学生が見た台湾社会2018』

観光・歴史・美濃客家
第20回愛知大学現代中国学部現地研究調査

愛知大学現代中国学部現地研究調査委員会

愛知大学　2019年　￥2,200
ISBN：9784863331556

愛知大学現代中国学部学生により行なわれた現地研究調査報告、台湾編。第20回は、台北市とその近郊、および客家が居住する高雄市美濃区を訪問。観光・農村の2班に分かれ調査を実施。「日台学生国際シンポジウム」での調査報告も中国語原文にて収録。

『学生が見た台湾社会2019』

企業活動・ツーリズム
第21回愛知大学現代中国学部現地研究調査

愛知大学現代中国学部現地研究調査委員会

愛知大学　2020年　￥2,200
ISBN：9784863331594

愛知大学現代中国学部学生により2019年に行なわれた現地研究調査報告、台湾編。第21回は、台北市をはじめ、新北市、桃園市、新竹市を訪問。企業・ツーリズムの2班に分かれ調査を実施。「日台学生国際シンポジウム」での調査報告も中国語原文にて収録。

旅 COLUMN 1

日本で楽しむ台湾ガイド
―そこに台湾があるじゃない―

阿多静香

黄色い車体の計程車（タクシー）が走ってなくても、大雨だっていうのにカラフルなレインウェアで疾走していく機車族（スクーター族）がいなくても、どこへ行くにも夾腳拖（ビーサン）な人がいなくても、いたるところに廟がなくても、画数の多い漢字（繁體字）の看板がなくても、大丈夫、探しに行けば台湾がそこにある。

これまで、仕事でも旅でも目的がなくても行くことができた台湾。次の旅先や留学先にと計画していた方も多かっただろうに、2020年以降渡航が制限されてから「台湾ロス」を感じる人が増えていることは確かで、私もそのひとり。台湾からしばらく離れようと決心しても、また台湾に引き寄せられてどのみち台湾ロスに。「台」や「湾」の文字が目に入れば台湾ネタだと思って振り返って見てしまうし、東京にある地名の「タカオ（高尾）」と聞けば脳内では「高雄（日本語読みでタカオ）」と変換して高雄（台湾第3の都市）の強烈な日差しを思い出している。台東は「タイドン（台湾南東部の県名）」と心の中で発音している。どうかしている。

そんな台湾ロスに救いの手が差しのべられた。日本国内で台湾を体験できるガイドブックが登場したのだ。台湾へ行ったつもりになれる、まだ行ったことがなくても台湾の雰囲気を感じられることだろう。

ある日の朝、私は、東京にある台湾を訪れるLifeを選んだ。日本国内にある台湾に触れる前と触れたあとの自分の変化を想定してみる。どうかしている状態は少し落ち着くはずだ。

まず手にしたのは『aruco　東京で楽しむ台湾』（地球の歩き方、2021年）。じつは私は『aruco台湾』『aruco台北』の取材・執筆に携わっている。今回は読者として『aruco　東京で楽しむ台湾』を活用してみる。同書はテーマ別、エリア別に、食・買・遊・美の各カテゴリーを紹介しているので、自分のテンションや興味に合わせて効率のよいプランを組み立てられるところが魅力。とくに、「エリア別おさんぽコース」はタイムテーブルがあるので、土地勘がなくても動きやすい。写真や文字を駆使して、おすすめポイントや見どころを網羅。由来や簡単な説明も織り交ぜてあるので、台湾を知らなくても問題ない。いつか台湾に行ったときに役立ちそうな料理図鑑などもあり、台湾に行けるその日を想像してもいい。同書は、自分でつくる必要のない「旅のしおり」的な存在。見ているだけで満足、しかし空腹。掲載店で腹ごしらえしようと出かけてみる。自宅から行きやすい「新竹」で炒米粉（焼きビーフン）。食べたら、どうかしている状態が落ち着いて、早くもリハビリできたの感。移動して、誠品生活日本橋で雑貨に囲まれて終了。蛇足だが、この日の移動はシェアサイクルを使った。シェアサイクル自体、台湾では2009年に「YouBike」として台北からサービスを開始。電動アシスト自転車ではない自転車が主流の中、2021年11月から嘉義市では電輔車（電動アシスト自転車）のサービスも開始。台湾にまた行けるようになったときには、居住者以外でも安全に気軽に利用できるようになっているよう期待したい。

次いで、関西方面に行くときが来たら手にしたい『おでかけ台湾in東京・京阪神』（朝日新聞出版、2022年）。「スタイリッシュ」「ニューウェーブ」「最旬」というキーワードから台湾に触れるのにはぴったりの内容だ。

この10年ほど、台湾で増殖しているのが日本への憧れフォーマットでつくられた店構えや内装。かき氷やカフェなどに見られる。たとえば、白木のカウンターや窓枠、老舗風の暖簾、メニューを書いた木札、木製トレーを使った定食スタイル、ドラマ「深夜食堂」っぽい雰囲気など、日本からインスパイアされた事柄を具現化しているが、それがわかりやすいこともあって、このようなスタイルが日本への憧れとしてフォーマット化されたのだと想像している。一方、日本では、ここ数年で新規オープンしたり改装した台湾関連の店で感じるのが、台湾への憧れフォーマットが存在しているのではないかということ。たとえば、漆喰調の白い壁に赤い文字が春聯（縁起のよい対句を赤い紙に書いて玄関などに貼る）、ペパーミントグリーンのドアや窓枠、花布（旧名は花仔布。牡丹の花などをプリントした布地）や大同電鍋（台湾の総合電機メーカー大同の電気調理器具）、阿嬤袋（茄芸袋とも。メッシュのナイロンバッグ）、花磚（マジョリカタイル）、鐵花窗（デザインのある面格子）、ほんのりレトロをインテリアに取り入れて。フォーマット化を悪い意味で言っているのではなく、台湾の雰囲気をおしゃれに解釈して、居心地のよい空間を上手に演出していると感心する。こういった店が多数掲載されているのが同書。台湾に魅せられた人たち、台湾出身者や縁者たちによって、台湾にいるかのような空気感と味が再現された物件が満載。「街角饅頭店　吉祥天」のフォーマット感ある今風の外観デザインに尻込みしながら、蒸したての芋頭饅頭（具なしのタロイモまん）を食べてみれば懐かしい台湾の味。感想を店主に伝えたところ、福々しいお顔に満面の笑み。私も満面の笑み。台湾を通じて温かい味とハッピーのシャワーを浴びた気分。リピーターが多いというのもわかる。また、2003年から手づくり肉まんを売っている「鹿港」のような物静かな実力派も健在。饅頭の皮への褒め言葉は「香醇Q彈（ふかふか＆もっちり、いい香り）」、つくれる人がいてこそのおいしさがあり、それに触れて私は幸せな気分。そして素直になって家路につく。こんなスポットが日本に点在するなら台湾に行かなくてもいいのかも、と、別の意味でどうかしてしまっている。ノックアウトされているとは思っていない、私の本能に刺さってくるだけだ。

さて、京阪神と東京の間にある名古屋には独自の台湾が存在する。台湾にない「名古屋名物元祖台湾ラーメン」だ。『台湾ラーメン　味仙の秘密』（マイタウン、2019年）を手にしてみる。擔仔麵（豚肉そぼろなどをのせ、小椀で食べる汁麺）をルーツにした誕生話から定着までを知ることができる。台湾と日本のかかわり、まじめさと熱心さ、家族観も垣間見える。現在は、台湾ラーメンから生まれた台湾まぜそば、そして台湾カレーへと広がり、これらの存在は台湾でも公認だ。台湾の人の心が寛容で何より。ちなみに、大粒のブラックタピオカを揚げパンに挟んだり、アイスや大福に混ぜたりした魔改造にも台湾の人は寛容だ。とはいえ、去年、メニュー名に「台湾」をつけて、さも台湾の伝統食、もしくは最先端フードを装い、流行に便乗して売り出したものの、それは香港フードだと炎上した食べ物もある。しかし信頼から定着を見せた台湾ラーメンには、「味仙」創業者の「負けじ魂」と「感謝」の気合があった。そういうことだろう。

余談だが、台湾には台湾スタイルのカレーがある。小～中学校給食にあたる營養午餐の定番メニューのひとつが台式咖哩だ。定義は、色は蛍光イエロー、味つけは淡白、片栗粉でつけたとろみ、メインの具はじゃがいもとにんじん、またはミックスベジタブル。現地で提供する店もあるので、そのときが来るまで「古早味咖哩飯」と覚えておいて損はない。

最後は、台湾ブームが来る前からある台湾料理店をはじめ、地方の店を掲載している『東京で台湾さんぽ』（イカロス出版、2021年）。掲載店を訪れてみれば台湾にいるような気になる。大丈夫、私はいたって正気。台湾の味にまじめに取り組む店主、明るくて話し好きな店主、久しぶりに対面する台湾の人や台湾好きたち、台湾に縁のあるお客さんなどによるマジックか私の思い込みか。いや、現実。こうした店に潜む、ちょっとした台湾に気づくからこそ現実だとわかる。たとえば、台湾ベジタリアンフード店「中一素食店　健福」のトイレの便座。HCG（台湾の精密セラミックメーカー和成集團）の温水洗浄便座なのだ。わざわざHCG。日本には優秀で有名な温水洗浄便座メーカーが数社あるというのに、そこ台湾メーカーなんだ、とニヤリ。来てよかった、心からそう思った。

そこに台湾があるじゃないか！　こうしたガイドブックのおかげで、どうかしている状態は小康状態にもっていけるようだ。

『aruco　東京で楽しむ台湾』

地球の歩き方編集室
地球の歩き方　2021年　¥1,430　ISBN：9784058016558

まるごと1冊、東京で台湾旅気分を楽しむ新しいガイドブック。台湾現地にもひけをとらない本格＆ローカルグルメに、おしゃれな台湾茶カフェ、最旬スイーツ、かわいい台湾雑貨も総特集。台湾の神様を祀るパワースポットや、台湾食材のお取り寄せ情報も掲載。

『おでかけ台湾　in 東京・京阪神』

朝日新聞出版　2022年　¥1,430　ISBN：9784023347199

既刊『おでかけ韓国 in 東京・京阪神』に続く台湾版。漢方カフェ、ローカル食堂、台湾雑貨、おとりよせ……。日本にいながら、「ここって台湾!?」と勘違いしてしまいそうなスポットを、東京と京阪神で約150軒紹介。

『台湾ラーメン　味仙の秘密』

国方 学
マイタウン　2019年　¥1,430　ISBN：9784938341312

「ウッ」ときて「辛っ」、そして「うまっ！」。名古屋名物・名古屋めしの代表格となった激辛・激うまラーメンはどのようにして誕生したのか。この味を生み出した今池の味仙とは。居酒屋「やん八」を37年続けた前大将で文筆家の著者が自らの体験も交えて謎に迫る。

『東京で台湾さんぽ』

矢巻美穂
イカロス出版　2021年　¥1,540　ISBN：9784802210478

東京とその近郊で楽しめる「台湾」をギュッと凝縮。台湾通がおすすめするとっておきの店や、台湾から上陸した大型ショッピングモール、人気の豆花店の店長による全国豆花店めぐりなどなど。きっと通いたくなる厳選98スポットをたっぷり紹介。

台湾を日常に

『「神農生活」のある暮らし』

神農生活CEO 范姜群季
グラフィック社　2021年　¥1,760　ISBN：9784766134728

ハイクオリティな食と雑貨の品ぞろえから台湾国内はもちろん、台湾への旅行者も愛用している「神農生活」。商品と生産者取材をとおして、「神農生活」が展開する34のものづくりストーリーを伝える。日本進出1号店を記念するブランドブック。

『妄想TRIP！　#おうち台湾』

ASAHI ORIGINAL
朝日新聞出版　2021年　¥990　ISBN：9784022783233

『#おうち韓国』に続く「妄想Trip!」第2弾は、台湾をクローズアップ。コロナ禍でなかなか台湾に渡航できないいまでも、料理レシピ、クラフト、漢方など、自宅で台湾を楽しむ方法はこんなにある。東京・大阪・京都・神戸で行きたい台湾カフェや料理店情報も満載。

阿多静香
あた・しずか

フリーランスライター・編集・翻訳

フリーランスのライター・編集者・翻訳者として台湾などアジアの情報を発信している。東京・小岩「楊州飯店」（閉店）で食べた鹹蛋仔（台湾シジミのにんにく醤油漬）と炒米粉で台湾にはまったのが1990年代。以降、台湾の人の客好（客好き）気質に甘えつつ、台湾のことを書かせてもらっている。好きなことわざは「臺灣錢，淹跤目」。繁栄している台湾だから生計を立てやすいの意。二胡のアマチュア演奏家でもあり、台湾の曲の演奏を通じて台湾の魅力を伝える活動もしている。

主な著書
・『台湾おしゃべりノート――地球の歩き方編集女子が見つけたTaiwan最強の楽しみ方教えます』共著、ダイヤモンド社、2014年
・『旅の賢人たちがつくった台湾旅行最強ナビ』共著、辰巳出版、2017年

台湾 旅 台南

古都・台南を歩き、台湾の歴史的多元性を知る

— 案内人 —
黒羽夏彦

台湾の歴史は先住民族（台湾では「原住民族」と表記）の時代から始まり、オランダ（北部はスペインも）、鄭氏政権、清朝、日本、そして戦後の中華民国と統治者が入れ替わってきた。台南を歩くと、それぞれ異なる時代相があたかも地層のように積み重なっている様子が垣間見えてくる。

まずは海側、現在の台南市安平（アンピン）区から見てみよう。そもそも、“台湾”は台南から始まったと言っても過言ではない。“台湾”という名称の語源は現在の台南近辺に暮らしていた平埔族（へいほぞく）（のちに漢族化した先住民族）のひとつ、シラヤ族の言葉Taiouanに求められ、これが漢字で“台湾”と表記されたという。安平を含む沿岸一帯は早くから交易拠点として注目され、漢人の船乗りたちが上陸し、朱印船貿易の日本商人も立ち寄った。シラヤ族との交易でえられた鹿皮は日本へ送られ、鎧など武具に用いられた。

そうした中、オランダ東インド会社が1624年にゼーランディア城を築き、台湾統治の足がかりを固める。現在は安平古堡（アンピンこほう）と呼ばれ、オランダ時代の城壁が残っている。1628年にはオランダと日本商人との貿易摩擦が原因で、日本人船長の浜田弥兵衛がオランダの台湾長官を人質にとるという事件もここで起こった。すぐ近くの安平老街（延平老街）の街並みもオランダ時代の道路に由来し、台湾で最初の街と言われている。

17世紀の中国は明清交替の動乱期にあった。清軍に敗れた鄭成功は「反清復明」を掲げて台湾へ来襲し、オランダ人を追い出してゼーランディア城を占領する（1662年）。このとき、鄭氏にゆかりのある福建の地名を取って安平城と改名された。鄭成功は日本人を母として平戸に生まれたという来歴を持ち、近松門左衛門「国性爺合戦」のモデルとしても知られる。

次に、現在、繁華街が軒を並べる台南市中西区のほうへ視点を移そう。ゼーランディア城は海防の要衝であったが、現在の中西区との間にはかつて内海が広がっており、陸地との交通は不便であった。そこで、オランダ東インド会社は1653年にもうひとつの拠点としてプロビンティア城を築く。鄭氏政権でもここに「承天府」という行政拠点が置かれた。その後、漢族風の様式に建て替えられ、「赤崁樓（せっかんろう）」と呼ばれるようになる。なお、この「赤崁」の発音もシラヤ語に由来する。

鄭氏政権は短命に終わり、1683年から台湾は清朝統治下に入った。当初、台湾島の行政組織である「台湾府」が現在の台南に置かれ、「台湾府城」と呼ばれた。そのため、いまでも台南は「府城」と呼ばれることがある。清代には対岸・厦門を経由する貿易で栄え、府城の城壁外で内海に面する「五条港」（5つの運河状の港）一帯は対外窓口として機能した。神農街を歩けば、当時の繁栄の名残を目の当たりにできる。

清朝がアロー戦争後に締結した天津条約（1858年）によって、台南の外港として安平が開港地となり、欧米の領事館や商館が建てられた。当時の建物もいくつか現存する。イギリス系商館・徳記洋行は台湾開拓史料蝋人形館として一般開放されている。隣接する旧倉庫は、崩れかかった建物にガジュマルが絡みつく風情が注目され、いまでは「安平樹屋」として人気スポットである。また、早くからキリスト教の宣教師も渡来して台南で布教した。1876年には府城の東側に台南神学校が設立され、1885年に創刊された「台湾府城教会報」（現在は「台湾教会公報」）は台湾でもっとも古い新聞とされる。

台南の繁栄は海上貿易と結びついていた。ところが、台南近辺の港湾は徐々に土砂で埋もれ、貿易港として不便になったため没落する。安平と府城との間に広がっていた内海は消滅し、現在の「五条港」はもはや海に接していない。さらに、清代末期には行政機能の中心も台北へ移され（「台湾府」は「台南府」と改称）、島都としての地位を失ってしまった。佐藤春夫の小説『女誡扇綺譚』（中公文庫、2020年）は没落した豪商の廃屋を舞台としているが、こうした台南の栄枯盛衰が背景をなしている。

黒羽夏彦　くろは・なつひこ
台湾 国立成功大学大学院歴史学研究科博士課程

東京での会社員生活を切り上げて、2014年3月から台南在住。当初は語学留学のつもりでしたが、そのまま大学院にもぐり込み、ずるずると居ついてしまいました。現在は台南市内で日本語講師をしながら、国立成功大学歴史学研究科博士課程に在籍。専門分野は台湾史（論文は主に日本統治時代にかかわるテーマで書いていますが、台湾史全般に関心があります）。暇があれば台南市内の路地裏を徘徊したり、廟を見て回ったり、ときには近隣地域まで足を延ばして史跡を見に行ったりしています。台南人女性と結婚し、台南の歴史と文化をこよなく愛していますが、台南の食文化における味つけの甘さと交通マナーの乱雑さには閉口。

主な著書・論文

- 『台湾を知るための72章』赤松美和子・若松大佑・編、明石書店、2022年
- 「台南新報社成立の背景——台湾海峡を往来する日本人と台湾漢人の接触点」『日本台湾学会報』第24号、2022年

台南は寺廟が台湾でもっとも多い。「全台首学」と呼ばれた孔子廟、媽祖を祀る大天后宮、関羽を祀る祀典武廟など、伝統と格式を備えた大廟ばかりではない。路地裏に入ればそこかしこに大小さまざまな廟があり、老若男女問わず多くの人々が参拝している。神様の誕生日にお祭りの行列が街を練り歩いているのを見かけるのも台南では日常茶飯事である。漢族の伝統的宗教文化がしっかり息づいている様子がわかるだろう。若者の間では縁結びの神様として「月下老人」の人気が高い。伊藤龍平・陳卉如『恋する赤い糸——日本と台湾の縁結び信仰』（三弥井書店、2019年）はこの「月下老人」を切り口として台南の廟を紹介している。

日本時代に入ると清代の城壁は取り壊され、区画整理によって街並みも変化した。新たに整備されたメインストリート、たとえば現在の中正路（かつては「台南銀座」と呼ばれた）にはバロック様式風の商家が立ち並び、一部はまだ残っている（ただし、外装は新しいので、注意深く見ないとわからない）。また、台南州庁（現・国立台湾文学館）、台南警察署（現・台南市美術館一館）、林百貨などランドマークであった大型建築はリノベーションされ、現在では台南の代表的な観光スポットである。

台南を取り上げたガイドブックでは、しばしば「美食」（グルメ）の街と紹介され（「府城美食」と呼ばれる）、食べ歩き指南をする本も多い。おいしいと評判のお店は、「五条港」及び「西市場」（日本時代に設けられた公設市場で、五条港の南に位置する）の周辺に多く、とりわけ昼間は国華街、夜は保安路が賑わっている。往年の食文化をめぐる情景を知りたい場合には、辛永清『安閑園の食卓——私の台南物語』（集英社文庫、2010年）をおすすめしたい。

古都・台南は島都の地位を台北に奪われ、現在ではひとつの地方都市に過ぎない。視点を変えれば、だからこそ台南は大規模開発から免れて多くの古い建築が残され、昔ながらの風情も街中にとどめられたと言える。近年、台湾意識の高まりとともに郷土の歴史を見つめ直そうという動きが現れ（日本時代建築のリノベーションもこうした脈絡で理解できる）、とりわけ台南が古きよき台湾情緒を残す街として脚光を浴びるようになった。わざわざ他所から台南へ移住し、「老房子」（古民家）を使って開業する若者たちも現れている。日本で台南への関心を集めるきっかけとなった一青妙『わたしの台南——「ほんとうの台湾」に出会う旅』（新潮社、2014年）も、台南の古さを「台湾らしさ」として肯定的にとらえる着想に特色があった。

台南では漢族の伝統文化に由来する寺廟や日本時代の建築が街中に混ざり合い、オランダ時代や先住民族・シラヤ族の痕跡も見いだせる。それぞれの時代相があたかも地層のように堆積しているところにこの街の特色がある。ふらりと散歩するだけでも、このような地層の断面がひょっこり顔をのぞかせているのに出くわし、台湾の歴史的多元性を実感するはずだ。近年、台南は日本でも注目され、関連本もいろいろと刊行されるようになった。そうした中には、台湾におけるいわゆる「親日感情」と日本時代へのノスタルジーとを結びつけた描写も見られる。しかしながら、日本時代はあくまでも歴史的多元性におけるひとつの層位に過ぎない。特定の部分にのみ目を奪われるのではなく、層面全体を見渡す視点を持って街歩きするならば、台南というプリズムをとおして台湾の歴史・文化・社会を総体として見つめるセンスを磨くことができる。

『女誡扇綺譚』（じょかいせんきたん）

佐藤春夫

中公文庫　2020年　￥1,100
ISBN：9784122069176

1920年、新進作家として文壇デビューして間もない佐藤春夫は、打狗（高雄）で歯科医院を開業している旧友の誘いで台湾へ渡る。当時、彼は複雑な恋愛問題を抱えて執筆もままならない状態にあり、いわば傷心旅行であった。本書は台湾旅行の見聞から着想がえられた9篇を収録する。

春夫は初めて訪れた異郷の風物に好奇の眼差しを注ぐばかりでなく、植民地統治の矛盾にまで鋭敏な観察眼を光らせている。たとえば、「殖民地の旅」は台中周辺で現地知識人たちと会話した様子を描く。とりわけ林献堂（台湾民族運動の指導者）から同化政策の是非について問われた際、春夫が煮え切らぬ返答をしたところ、林から礼儀を持しつつも鋭い切り返しを受け、その場面の描写には緊迫感がみなぎっている。

先住民族調査に従事していた森丑之助から聞いた話も作品に反映されている。「霧社」は先住民族の暮らす地域を訪問した記録であるが、統治政策の負の側面も垣間見え、その後、1930年に勃発する霧社事件の予兆すら感じさせる。先住民族の伝説に話題を取った「魔鳥」は野蛮人／文明人の対比を相対化させ、文明批評的な視点を示す。

表題作「女誡扇綺譚」は台南の廃屋を舞台とした推理小説仕立ての伝奇譚である。没落した豪商の娘が、破談になった相手が戻って来るのを死んだあとでも待ち続けている。廃屋で幽霊の声を聴いた主人公の「私」は、漢詩人である現地の友人とともに真相を突き止めようとする。この物語自体はフィクションだが、作品中では春夫自身が台南を歩いたときにじかに目の当たりにした風景をリアルに描き出している。編者解説では関連地図を掲げて現在の状況についても説明されているので、本書を片手に台南で文学散歩をしてみるのも一興であろう。

『台湾・台南そして安平！』
日本公務員の駐在日記

阿部真行

上毛新聞社　2019年　￥1,100
ISBN：9784863522268

著者は台湾で唯一の「日本公務員」。2013年6月に群馬県みなかみ町役場から台南市政府新聞及国際関係処へ派遣され、本書刊行時点では「みなかみ町台湾事務局長」と「台南市政府対日事務顧問」の肩書きを持つ。日台の自治体交流が任務であるが、PR活動にも工夫をこらす必要を感じて台湾現地の旅行会社と組み、ツアー商品の販売という形で具体的なインバウンド事業につなげた。そうした実績から台南市旅行商業同業公会の顧問にも就任する。

本書で繰り返し強調されるのは次の2点である。第1に、相手（台湾）側の立場に立って考え、「双方にとって利益の出る関係」をつくること。それは経済的利益ばかりではない。情報や知識、さらにはメンツも含め、かかわったみんなが何らかの形で納得できる「雙贏」（ウィンウィン）関係で進めていく必要がある。第2に、「有關係沒關係、沒關係有關係」（関係があれば何でもできる、関係がなければ何にもできない）。顔の見える人間関係をつくって初めて本気の交流事業につなげられる。価値観も仕事の進め方も違う異国の社会に単身飛び込み、試行錯誤で信頼を築き上げた苦労は、本書で紹介されるエピソードの一つひとつからうかがえる。単に自治体交流の活動記録と言うにとどまらず、台湾への事業進出、台湾人観光客の呼び込み、さらには草の根交流活動など、広い意味で台湾関係事業にかかわる人々にとって必要なヒントが読み取れるだろう。

タイトルは「駐在日記」となっているが、観光ガイドにも多くのページが割かれている。カラー写真をふんだんに用いて台南の食文化や観光名所を簡潔に説明しており、とりわけ安平（アンピン）を重点的に紹介しているところにも特色がある。

『台南文学の地層を掘る』
日本統治期台湾・台南の台湾人作家群像

大東和重

関西学院大学出版会　2019年　￥4,180
ISBN：9784862832733

日本の植民地統治下、あくまでも一地方都市に過ぎなかった台南でも文学活動に心血を注ぐ人々がいた。本書のタイトルには「文学」とあるが、歴史・民俗・言語の研究も含め、文筆活動による知的営為として広義にとらえ、時代的制約の中でも自らの表現を試みた人々の姿を描き出している。台南における文学的営為を問うところに本書の狙いはあるが、その前提として関連知識が整理されているので、人物群像劇的な叙述をとおして台南の歴史や文化に関するさまざまな知見がスムーズに吸収できるし、彼らが生きた時代的雰囲気も感じ取ることができる。

風車詩社の面々は日本のモダニズム文学、さらにその背景をなす西洋文学から影響を受けて詩の創作を試みた。中国新文学運動の影響を受けた荘松林は漢族の民俗文化研究に没頭した。言語学者・王育徳は伝統歌謡「歌仔冊（コアチェ）」や伝統演劇「歌仔劇（コアヒ）」をとおして台湾語研究に従事した。作家・葉石濤は先住民族・シラヤ族への関心を作品中に表現した。異なる時代相が地層のように積み重なってきた歴史的多元性にこそ台湾の特徴が求められる。それぞれ自らの関心に応じて台南の歴史的地層を掘り下げながら、この郷土の文化を表現しようと奮闘した様子が見えてくる。

著者の前著『台南文学――日本統治期台湾・台南の日本人作家群像』（関西学院大学出版会、2015年）は台南とかかわった6人の日本人（佐藤春夫、前嶋信次、庄司総一、西川満、国分直一、新垣宏一）を取り上げている。それぞれ前述の台湾人たちと交流があり、台湾人／日本人という立場の相違はあれども、台南という土地とその文化への愛着を同様に懐いていた。こちらも併読すれば、より多様な観点から台南という土地の来歴を見つめることができるだろう。

『レトロな街で食べ歩き！古都台南へ＆ちょっと高雄へ』最新版

岩田優子

イカロス出版　2020年　￥1,760
ISBN：9784802208642

近年、台南に焦点を合わせたガイドブックもいろいろと出版されるようになってきた。それぞれ工夫がこらされており、良し悪しは一概には語れないのだが、もし初めて台南に来て、なおかつ腰を落ち着けて街歩きしてみたいのであれば、本書をおすすめできる。

台南は美食（グルメ）の街と言われる。本書は有名店をあれこれ列挙するのではなく、いわゆる「小吃（シャオチー）」（軽食）やスイーツの一品ごとにひとつのお店を紹介するという形で絞り込んで、本文の説明と写真を眺めるだけでも台南の食文化をひととおり了解できる構成となっている。食べ物だけではない。帆布カバン、刺繍靴、デザイン性の高い雑貨も魅力的だし、疲れたら茶芸館やカフェでひと休み。最近は若者が「老房子（ラオファンズ）」（古民家）を利用して開業するケースも増えており、レトロな店構えにも注目したい。店舗紹介の写真を見ているだけでも、家に居ながらにして観光気分を味わうことだって可能だ。

台南へ行ったら、有名な観光スポットを見るばかりでなく、ふらりと路地裏へ入り込んで台湾らしい情緒を感じ取って欲しい。本書では路地裏（新美街、国華街、信義街、神農街、正興街、府中街）をメインに台南中心部が紹介されているので、本書を片手に歩けば迷うことはないだろう。時間に余裕があれば、台南中心部から離れたところへ行ってみるとおもしろい。本書では3つのルートが紹介されている。まず、海に近い台湾最古の街・安平（アンピン）。それから、山地に近い玉井（マンゴーの聖地）と新化老街。さらに、隣の高雄まで足をのばして美濃（客家の街）と旗山（バナナの街）。路地裏散歩もよし、周辺地域へ遠出してみるもよし、滞在時間や自身の興味に応じてルートを組み合わせれば、台南の持つさまざまな姿が眼前に立ち現れてくるだろう。

『台南』
「日本」に出会える街

一青 妙

新潮社　2016年　¥1,760
ISBN：9784106022715

日本人に大人気の台湾の中でも注目の街・台南。日本統治時代からの建物をリノベーションしたカフェやホテル、台湾人にも人気のマンゴーや牛肉湯の名店、バロック様式の建物が並ぶ雰囲気たっぷりの老街、若者のおしゃれ店が増え始めた西市場、製糖工場跡地の観光スポットなどなど。台南に通いつめ、「親善大使」第1号にも任命された著者による、とことんディープな台南案内。

『愛の台南』

川島小鳥

講談社　2017年　¥1,650
ISBN：9784062202084

「写真展のため、初めて台湾を訪ねたのが縁の始まり」。台湾と台湾人の温かさに恋をした著者がいちばん好きな街、台南。おいしい麺、楽しい鍋屋、世界一のかき氷、おしゃれなカフェ、きれいな海――。魅力はたくさんあるが、ガイドブックはまだまだ少ない。そこで、台南を知り尽くした著者がふんだんな写真と約150軒の店舗情報がつまった台南案内本を制作。眺めているだけでも幸せになる1冊。

『アイラブ台湾屋台めし　台南編』

フジナミコナ

イースト・プレス　2019年　¥1,298
ISBN：9784781618425

「台湾グルメは南もウマイ！」。女子ひとり、台湾屋台・食べまくりの旅、台南編。おいしい台湾のB級グルメ・屋台めしを求めて、新竹・台中・台南・高雄・墾丁へ。台湾を南へぐるっとめぐってむさぼり尽くす、食と人情とノスタルジーにあふれたオールカラー・旅コミックエッセイ。

『来た見た食うた ヤマサキ兄妹的 大台南見聞録』

ヤマサキタツヤ、ヤマサキハナコ

書肆侃侃房　2018年　¥1,760
ISBN：9784863853126

「台南は中心部だけにあらず！」。台南のあちらこちらで見て聞いて食べ続けて約4年。いろんな意味で大きくなった浪速の食いしん坊・ヤマサキ兄妹による、ヤングなオシャレ層だけじゃない、オッサンもトリコになる大台南見聞録。写真は一切ナシ、絵で綴るオモロイ大台南。

『安閑園の食卓』
私の台南物語

辛 永清

集英社文庫　2010年　¥748
ISBN：9784087465846

台湾の古い街、台南の郊外にたたずむ広大な屋敷「安閑園」。緑豊かな庭園と季節の実りをもたらす果樹園や野菜畑。そして母たちが腕をふるう彩りあふれる日々の食卓の風景。1930年代の台湾で生まれ、この安閑園に育った著者が、子ども時代の食の記憶を丹念に書き綴る。大家族のにぎわいと料理の音や匂いが鮮やかに立ちのぼり、人生の細部を愛することの歓びが心に響く。幻の名エッセイ、待望の復刊。

『台南文学』
日本統治期台湾・台南の日本人作家群像

大東和重

関西学院大学出版会　2015年　¥3,740
ISBN：9784862831910

台湾南部の古都台南で、日本統治期の1920年代から'40年代にかけて、日本語を用いた文学の創作活動があった。佐藤春夫や新垣宏一ら、6人の日本人作家は、知名度や才能の多寡・分野は異なる。だが同じく、台南の街やそこに住む人々と切ることのできない縁を結び、文学を愛好し、この古く美しい街を描いた。かつて台南の街を真紅の花で飾った鳳凰木のように、咲き、散った、小さな文学の花、「台南文学」を描く。

『六月の雪』

乃南アサ

文春文庫　2021年　¥1,144
ISBN：9784167916893

声優への夢破れ、祖母とふたりで生活する杉山未來。入院した祖母を元気づけようと、未来は祖母が生まれた台湾の古都・台南を訪れることを決意する。祖母の人生をたどる台湾の旅で、未來は戦後に台湾の人々を襲った悲劇と植民地だった台湾に別れを告げた日本人の涙を知る。そして、たどり着いた祖母の生家で、未來は人生が変わる奇跡のような体験をするのだった。7日間のひとり旅が生んだ、人々との絆がもたらした奇跡とは。

『台湾少女、洋裁に出会う』
母とミシンの60年

鄭 鴻生／天野健太郎・訳

紀伊國屋書店　2016年　¥1,870
ISBN：9784314011433

日本統治下の1930年代の台湾に「洋裁」に夢をたくした少女がいた。『主婦之友』『婦人倶楽部』――。日本の婦人雑誌に魅了された少女は親の反対を押しきって、洋裁店の見習いとなり、やがて戦前の東京に留学を果たす。戦後、台南に自ら洋裁学校を開校する彼女が息子に語ったオーラルヒストリーから、台湾の近代が浮かび上がる。

『鄭成功』（上下巻）
旋風に告げよ

陳 舜臣

中公文庫　1999年　各¥984
ISBN：9784122034365（上巻）
9784122034372（下巻）

国姓爺鄭成功、幼名福松は、東アジアの海の実力者を父として、日本人田川氏の娘を母として、平戸に生まれた。7歳のとき福建泉州へと渡り、父の元で成長、やがて南京の太学に学ぶ。折りしも李自成軍に首都北京を占領された明朝は滅亡、山海関を越えた満洲鉄騎軍は中国大陸制圧に向けて怒涛の南進を開始した。唐王隆武帝を奉じ、父とともに反清勢力を率いることになった若き英雄の運命は。上下巻。

『鄭成功』
南海を支配した一族

奈良修一

山川出版社　2016年　¥880
ISBN：9784634350427

世界的に海外貿易が盛んになった17世紀。ヨーロッパではイギリス、オランダが勢力を伸ばし、東アジアでは日本や明の商人が活躍した。中でも鄭芝龍・鄭成功父子は最大の勢力を誇り、とくに鄭成功はオランダ東インド会社を台湾から追い出したことで有名である。台湾の開発にも寄与した、鄭氏一族の歴史を概観する。

『1930 台湾烏山頭（うさんとう）』
水がめぐる平野の物語

謝 金魚／賴 政勳、林 容萱・絵／台南市政府文化局・編訳

北國新聞社　2022年　¥1,500
ISBN：9784833022491

台湾の台南市が2020年に烏山頭ダムを中心とする灌漑施設「嘉南大圳（かなんたいしゅう）」の着工100年記念として出版した絵本の日本語版。舞台は日本統治時代の台湾。金沢市出身の画家である主人公・伊東哲（さとし）が、嘉南大圳建設に取り組む同郷の八田與一（よいち）技師から依頼され、施設の絵画制作に挑むストーリー。台湾の作家で本書の原作者・謝金魚の金沢探訪記「伊東哲を探して」や伊東哲が描いた染色画の図解なども収録。

旅 COLUMN 2

台湾に暮らして

阿部由理香

標題には「台湾に暮らして」とあるが、筆者は、実際には台北とその近郊にしか住んでいない。台北のことを、漫画『ワンピース』由来の「天竜国」と揶揄して言うこともあるように、台北だけを見て台湾を語るなとはよく言われる。私はそんな台北とその近郊の町に、1990年代初頭からいままで住んでいる。今年の冬は例年にない寒さが続き、それに続く大雨で、うんざりしながら、そういえば、南国台湾というイメージのまま来た来台1年目も、4月になってもあまりに寒く、職場の方にウールのカーディガンを貸していただいたなあと思い出す。'90年代の台北では大雨が降ろうものなら、またたく間に道路には水がたまり、地下駐車場にも雨水が流れ込むため、大雨が降りはじめると、急いで車を出して避難させていたものだった。

すっかりきれいに整備されたいまの台北からはまったく想像もつかないことだが、振り返ってみれば、当時は、世界最長と言われる「戒厳」状態が1987年に解かれてから、まだ5年も経っておらず、インフラを含めた社会のあらゆることが未整備だった。もちろん、日本の食品も手に入りにくかった。いまは、ローカルのスーパーですら、ここは日本かと一瞬勘違いするほど日本のものが並んでいるが、当時は、日本からインスタントコーヒーを持ってくるようにとアドバイスされたりするなど、日本ではあたりまえに手に入る日常的なものが高価だったり手に入りにくかった。一般的に物価は安かったとは言われるが、家電は目が飛び出るほど高く、電子レンジがあまりに高く、日本から持ってきた友人もいる。

2年の任期で来た台湾だったが、夜の台北の街は暗く、インフラも未整備で、日本の食品も手に入れにくく、しかも台湾に家族がいるわけでもないのに、なぜ、ここまで住み続けているのか。それは、もちろん、若かったこともあるが、ひと言で言えば、台湾の社会が変わっていくエネルギーを浴びてしまったからなのかもしれない。当時は、来台が1年違うと、ひとつ前の台北駅を知っている人、中華路の中華商場を知っている人、それぞれ知っている景色が違うほど、台北の町はどんどん変わっていった。いまは台北圏を縦横無尽に走っている快適な都市交通システム（MRT）も一部完成してはいたが、本格的な建設は始まったばかりで、その工事のホコリと車の排気ガスとで大気汚染はものすごく、とてもじゃないが薄い色の服は着ることができなかった。当然、町を走る車もいつ洗車したのかと思うほど汚れていた。しかし、社会が変わっていくという、その見えないエネルギーに、部外者でありながらも、なんかワクワクし、インフラ整備・国家6カ年計画の完成形を見てから、帰国しようと思っていたのだが、その6カ年がなかなか終わらず、そのうち、台湾の総統の直接選挙、国民党から民進党への政権交代といった台湾社会の民主化を目の当たりにし、この社会がどう変わっていくのか、もっと見ていたくなったのだと思う。

インフラ整備とともに、社会の制度もどんどん整っていった。外国人の就業に対して就労ビザが出る職種が増え、2カ月の停留ビザを更新しながら働くという違法すれすれの不安定な待遇も変わっていった。健康保険制度も整備された。それまでは、保険に入れない人や、保険が使える医療機関が少ないなどの問題があったのだが、1995年より国民皆保険制度が始まり、ほぼ全国民及び合法的に台湾に居留する外国人に加入が義務づけられ、健康保険が使える医療機関も増えていった。そして、医療機関のオンラインネットワークの構築に加え、当初、紙のカードだった保険証も、2004年からICチップ入りの現在の健康保険カードに変わったことで、保険加入者情報と医療情報が連結された。昨今のコロナ禍においても、この制度を使ったさまざまな政策（マスク配布、簡易検査キット配布、隔離情報等の把握）が滞りなく進められている。ちなみに保険証番号は身分証番号と同じで、ほぼ全員が保険証と身分証のカードの2枚を所持している。

社会の変化、とくに民主化が進み、台湾アイデンティティが強調されるようになり、中国史しか教えられていなかった義務教育に初めて台湾の歴史が取り入れられるようになった。そうした中、大学や大学院でも台湾史の講座が設けられるようになり、ちょうど大学院に進もうとしていた筆者も台湾史の講座がある大学院へと進んだ。台湾は過去50年間、日本による植民地統治を受けている。そうした過去の事実は忘れてはならないし、もし、知らなければ、知る努力をしなければならないと思う。そして、その時代には、もちろん大勢の日本人も台湾でいろいろな形で生活していたわけで、台湾で生まれ育った人も大勢いた。そうした人のことを「湾生（かんせい）」ということは、ご存じの方もいるだろう。これから紹介する『ときを駆ける老女――台湾・日本から世界、そして台湾へ』（彩流社、2020年）の著者もそのひとりだ。

著者の鈴木れいこさんは、台北市に生まれ12歳で日本の敗戦により台湾を去らざるをえなかった湾生だ。本書は、台湾に生まれ、裕福な家庭で育った著者が、日本の敗戦により台湾から引揚げ、台湾と縁のない生活を送りながらも、ふとしたときに台湾との縁が現れ、定年退職後は、日本各地や世界各国に移り住む生活をし、最後には台湾をふるさとと実感していく心模様を描いたライフヒストリーである。その心模様を著者は同書で「日本人だけれど、一二歳まで過ごした大地が異国となって去ってしまい、それを理由に精神構造は複雑を極めている」と書く。定年後、再訪した台湾が思い描いていた姿ではなかったことにとまどい、それでも、短期的に台湾に住んでみたりする中、台湾に関心がなかったお孫さんが台湾に留学することを決めたことで故郷喪失の不安が消えたと言う。波乱万丈にすら見える著者の人生は、故郷台湾を再認識し、それを失った喪失感を取り戻すための旅だったのかと思えてくる。同書は歴史書でもなく、観光、グルメの書でもないが、台湾と日本のつながりを考えることができる1冊だと思う。

さて、次に紹介する『台湾探見――ちょっぴりディープに台湾体験』（ウェッジ、2018年）は、副題にあるように、台湾をより深く知ることができる1冊だ。著者の片倉真理さんをご存じの方も多いだろう。台湾を紹介する雑誌では、必ずと言っていいほど登場する台湾在住のライターだ。同書には、著者の長年にわたる地道な台湾各地の取材で出会った人々との交流も描かれ、観光ガイド本とはひと味違った台湾を垣間見ることができる。

取り上げられている内容は幅広く、航海の神様の「媽祖」、日本へも輸出されている「愛文マンゴー」の開発秘話、凍頂烏龍茶の茶畑訪問、地方都市の魅力、歴史スポット、そして、観光ではなかなか訪れにくい東海岸や先住民族の村や祭り、離島の旅、そして、新たな台湾の魅力を生み出している若者たちの取り組みも紹介されており、さまざまな台湾の魅力が余すところなく伝えられている。ふんだんに掲載されているカラー写真が内容をより際立たせ、その場にいるかのような錯覚すら覚える。

すっかり居住者になってしまった筆者は、最近では来台当初のようには台湾各地の旅をしていない。本書は、知ったつもりになっていた台湾の魅力にあらためて気づかせてくれた。コロナ禍でなかなか台湾に来ることができない、あるいは、台湾をもっと知りたいと思っている方に、ぜひ手にとっていただきたい1冊である。

『ときを駆ける老女』
台湾・日本から世界、そして台湾へ

鈴木れいこ
彩流社　2020年　¥1,980　ISBN：9784779127014

高原に住み、街中に暮らし、南にも北海道にも住んだ。台湾、スペイン、メキシコ、コスタリカ、アメリカなど思いつくままに暮らした。自ら根無し草の生き方を選び、物を捨て、人とつながる人生を送る“高等遊民”の足跡。

『時をかける台湾Y字路』
記憶のワンダーランドへようこそ

栖来ひかり
ヘウレーカ　2019年　¥1,870　ISBN：9784909753052

台湾人との結婚を機に台北に移住した著者は、あちらこちらで出会うY字路の魅力にとりつかれ、歴史を調べはじめた。現地を訪ね歩き資料をめくり、忘れられた記憶と物語に耳を傾ける。著者が訪れたY字路から、とくに魅力的な約50カ所を写真や古地図を使い紹介する。

『台湾探見（フォルモサ）　Discover Taiwan』
ちょっぴりディープに台湾体験

片倉真理／片倉佳史・写真
ウェッジ　2018年　¥1,650　ISBN：9784863102002

台湾在住20年の作家夫婦が取材体験をもとに、各地の風土や祭典、歴史、日本とのかかわりなどを紹介した紀行エッセイ。秘境探索、田舎散策、歴史建築探訪、ご当地グルメ、島旅などのほか、愛文マンゴーの開発秘話や凍頂烏龍茶の茶畑訪問記など、厳選したネタが満載。

『いま、台湾で隠居してます』
ゆるゆるマイノリティライフ

大原扁理
K&Bパブリッシャーズ　2020年　¥1,540　ISBN：9784902800678

明るい人情はマイノリティもすんなり受け入れ、ホームレスにもLGBTにも物売りの少女にも温かい。言葉に不自由な外国人隠居もマイノリティだが、ここでは楽なことに気づく。31歳で17万円を握りしめ、台湾へちょっくら移住&隠居した筆者のしみじみ楽しい感動エッセイ。

『たんしんつうしん』
台湾だより

台南じぃじぃ
文芸社　2021年　¥1,320　ISBN：9784286223209

「拝啓　我が妻殿　きちんとひとりで生活しています」。50歳を過ぎて単身赴任。でも、ここ台湾は太陽が燦燦と降り注ぐ南国。明るく楽しい台湾を満喫しよう。一喜一憂の単身生活の中、「楽しさ」を見つけ、台湾の長短をあわせた特色と起伏に富んだ日々を綴った記録。

『いちばんかんたん&たのしい　大人の台湾案内』　現地在住人オススメのルート通りに行くだけ!

台湾在住スタッフ・編
ワニブックス　2018年　¥1,320　ISBN：9784847096952

うまい食、朝・夜市、下町レトロ、開運、絶景……。王道から超ディープまで、掲載された午前ルート・午後ルート・1DAYトリップから興味に合わせて選ぶだけ。台湾在住の編集スタッフがおすすめする、初めてでも安心なハズレナシ最高の旅マニュアル。

阿部由理香

あべ・ゆりか

中日翻訳者

元銘伝大学応用日本語学科講師。現在は中日翻訳に専念。専門分野は台湾法史。台湾に住んでいるうちに、台湾という土地に興味を持つようになり、大学院へ進み台湾の歴史や台湾社会と法の関係を学び研究した。民主化が進み、台湾社会が変化するとともに法制度も整備されていく中、台湾に住む外国人の居留に関する法制度、とくに永久居留制度の創設過程に存台日本人が大きくかかわったことに非常に関心を抱き研究を行なった。また、日本統治時代に高等教育を受けた台湾のお年寄りからの聞き取りをとおして、過去、そして戦後の日台関係について多くのことを学んだ。

主な著書・翻訳論文

- 『台湾人的国籍初体験：日治台湾与中国跨界人的流動及其法律生活』共著、五南図書出版、2015年
- 「戦後台湾女性のよそおい文化――社会現象としての日本嗜好」『二つの時代を生きた台湾』翻訳論文、三元社、2022年

台湾鉄道 旅

ノスタルジック＆エキゾチック 台湾鉄道旅

— 案内人 —
松葉 隼

松葉 隼 まつば・じゅん
一橋大学博士

専門分野は、台湾史研究、鉄道。お気に入りの路線は山線と北迴線。お気に入りの駅は泰安駅（旧駅）。台北の臺鐵便當では、いつも「排骨便當（八角）」を食す。インフレ進む台湾で臺鐵便當がいつまでこの値段を維持できるのかが気になる日々。最近は日本風便當など新機軸も多いがむしろこの味こそが「台鉄」。昨年から新型通勤電車・特急電車導入に湧きつつある中、復興号やEMU300、EMU1200引退のニュースに衝撃を受ける。台湾鉄道の多様性やレトロさが着実に過去のものになりつつあり、嬉しさと悲しさが相半ば。2020年の脱線事故以来、進みつつある「公司化」は、台鉄を今後大きく変えるはず。そうなる前に、一刻も早く台湾で鉄道旅を楽しんでほしい。

主な著作・論文

- 『鉄道技手前畑彦太郎的攝影記録：「建主改征」時期的台湾鉄道』共著、国立台湾博物館、2021年
- 「日本統治初期台湾における汽船経営：台湾人海運経営の転換」『日本植民地研究』第32号、2020年、pp.17-37

旅行者として、その土地を知るうえで、どのように旅を、移動をすべきか。もっともよいのは歩くことだろう。とはいえ、沖縄より南に位置し、熱帯の地にかかる台湾で歩くことはあまりおすすめできない。となると、自転車か。これはありだろう。多くの人が自転車で台湾を一周しており、自転車道の整備も進んでいる。だが私は、鉄道での旅を推したい。できれば、高速鉄道ではなく、普通の鉄道でゆっくりと旅することをおすすめしたい。

列車には普通、大きな窓が取りつけられ、そこから雄大な景色を楽しむことができる。「パノラマ」のように、窓の外をめくるめく景色が行き交う。高速鉄道では速すぎて何があったのかときどきよくわからないし、高速道路ではおもしろい場所ほど防音壁が視界を塞ぐ。また、鉄道は比較的古い乗り物であるため、街は駅を中心につくられていることも多く、街と郊外、田舎の様子や違いが手に取るようにわかる。鉄道の旅には、ダイナミズムとともに、生活の雰囲気が交じる。

台湾の鉄道、とくに国有鉄道である台湾鉄路管理局（台鉄）では、飛行機はもちろん、高速鉄道や高速バスと間違いなく違う空気感がある。スタイリッシュやシステマティックとは言えない、懐かしくてゆっくりとしている。車内のいたるところで広げられている台湾語の会話、「台鉄弁当（タイティエビェンタン）」（駅弁）の匂い、どこか間延びした放送、少し古ぼけた車両。車窓からはビンロウの木々とレンガの古民家が見える。台鉄の車内では、五感すべてから「台湾」を感じることができるのだ。

日本の鉄道ファンは、しばしば台湾の鉄道に懐かしさを求める。と同時に、異国へ旅をする以上、ノスタルジックだけでなく、エキゾチックな体験がほしい。台鉄はこのふたつの要求をしっかりと満たしてくれる。

現在の台鉄の路線のうち、とくに西部幹線と呼ばれる縦貫線（基隆～高雄間）などは、台湾が日本の「植民地」であった頃に建設され、開業した路線である。もちろん、それから現在にいたるまで、路線や駅には多くの改良が重ねられ、車両も大きく異なっている。それでも、日本人は台鉄にどこか懐かしさと親しみやすさを感じる。それは日本時代に台湾へと持ち込まれた、鉄道に関するシステムがいまなお台湾で「生きている」からだろう。駅舎、プラットホーム、列車の座席、きっぷの買い方など、細かな部分は日本と類似するところが多い。外国人旅行者として台鉄を利用する際に、さほど迷うことなく列車に乗ることができるのは、慣れ親しんだ日本の鉄道と似た部分が多いからだろう。もし海外で鉄道に乗ることに抵抗感があるならば、台湾での挑戦をおすすめしたい。

一方で、台鉄を中心として、台湾の鉄道はかなり多様性に富んでいる。台鉄でも、自国・台湾製の車両はまだまだ少数派だ。現在は、通勤電車が韓国製、特急電車は日本製を中心に導入が進められ、昨年導入された新型特急も日本製だ。九州や北陸を走る特急電車と少し似ている。2000年代から導入された特急電車もやはり日本製が中心である一方、1990年代以前の車両では、日韓両国以外にも、南アフリカ、イギリス、イタリア、インド、アメリカなどさまざまな国から導入している。台鉄はいわば世界の鉄道博物館だった。こうした多彩な車両は、当時の台湾の政治や外交関係を反映している。中国との関係から、多くの国は台湾との外交関係を有することは難しい。しかし、経済的な関係を維持、強化することで、相手国に台湾（中華民国）という国の存在をアピールすることができる。鉄道車両もそのひとつだった。鉄道車両の隅には、製造したメーカーと製造国を示すプレートが掲げられていることが多い。気になる方はそのプレートを確認してみよう。

台鉄以外にも、台湾にはおもしろい鉄道がある。かつて、台湾の鉄道は台湾最大の産業である砂糖を製造・輸送するために必要なツールだった。台湾各地には、製糖工場の跡地が残されており、製糖用に使われた鉄道もその周囲を中心に保存され、一部は観光用鉄道として乗車することもできる（溪湖（ケイコ）、蒜頭（サンタウ）、新營糖廠（シンエイ）など）。この製糖用の鉄道は、かつては台湾中南部でよく見ることができた。現在では、南部雲林（ウンリン）県の虎尾（トラビ）を中心に、サトウキビの収穫と輸送に利用されている姿を見ることができる。サトウキビ畑の中を、台鉄より小型の車両がゆっくりと走る姿は日本ではなかなか見ることができない貴重なものだ。現在残されている車両は、日本やドイツ製のものが多い。

南部の嘉義県には、日本だけでなく世界でも有数の登山鉄道、阿里山（アリサン）森林鉄道がある。阿里山森林鉄道は、台湾の貴重な資源である木材の伐採や輸送を円滑に行なうために建設された。現在は、阿里山周辺地域は国立公園に、ヒノキなどは天然記念物に指定されたため、鉄道は観光客の輸送に活躍している。約70kmの路線で、標高2千mほどを登っていくこの路線には、厳しい山を登っていくため、非常に多くの「仕掛け」がある。

台湾では、いまなお多くの人や貨物を輸送するために鉄道が活用されている一方で、すでに本来の役目を終えていながらも、観光や文化の保存を目的に残され、動いている鉄道も多いのだ。そしてその保存対象は、レールや列車だけでない。

中北部・苗栗（ビョウリツ）県には、ふたつの廃線跡がある。いずれも、日本統治時代に建設されながら、災害や改良のために廃止になった区間である。これらの廃線には、レールだけでなく、使わなくなった橋や駅舎が残され、一部区間は歩くことや、アトラクションに乗ることも可能だ。このほかにも、各地に駅舎や、鉄道員が住んでいた住宅などが保存され、リノベーションが進み、気軽に楽しめる環境が整いつつある。

台湾の鉄道はこうした、古くからあるものだけではない。社会と同じく、台湾の鉄道は着実な変化と進歩を遂げつつある。2007年、台北（当時は板橋）から高雄（左営）間を結ぶ高速鉄道、台湾高鐵（カオティエ）（台湾新幹線）が開業し、1990年代からは、台北を皮切りに、高雄、桃園、台中に都市鉄道である捷運（ジェユン）（MRT）が次々に開業していった。これまでの台鉄は都市と都市を結ぶ輸送がメインであったが、徐々に拡大していく大都市の中を鉄道で移動する機会も増えている。こうした捷運では、日本と同じくICカードでの乗降が普通となり、現在では台鉄のすべての路線でもICカードが利用できる。また、先ほど懐かしいとかノスタルジックと呼んだ台鉄も、各都市で路線の地下化や高架化、駅の改築や増設が急速に進んでいる。1989年に地下化された台北駅以外に、2015年に基隆駅の地下化、2020年に台中駅の高架化が完成、現在は高雄、台南、桃園、新竹駅などの主要駅で地下化などの改良工事が進められている。これらの工事が進むと、列車の窓から見えた街の様子は、暗いトンネルの中へ消えていくだろう。新竹や台中、高雄などには日本統治時代に建設された駅舎が保存されているが、駅としての機能が活用されているものは徐々に少なくなりつつある。駅の周りは整理され、美しくなることは素晴らしいが、鉄道と人々の距離は、これからも近いものであって欲しい。

台湾の特徴や変化、多様性は、鉄道からも感じることができる。現在、台湾の鉄道で生じている変化は、これまでの50年、あるいはこの100年で最大のものになるかもしれない。鉄道ファンとしては、その変化に大きな期待をしている。とはいえ、もしかすると台湾の鉄道で感じられるノスタルジーは、意外に早く過去のものになってしまうかもしれない。台湾の鉄道を通じ、台湾を知るには、いまが絶好のチャンスだ。

『蓬莱島余談』
台湾・客船紀行集

内田百閒

中公文庫　2022年　￥990
ISBN：9784122071650

鉄道ファンの嚆矢は一体誰なのか、この問いの答えはいくつかあるものの、そのひとつの答えは間違いなく内田百閒（1889～1971）だろう。「なんにも用事がないけれど、汽車に乗つて大阪へ行つて来ようと思ふ」（『第一阿房列車』新潮文庫、2003年）という一文が鉄道紀行文学を切り開いたと言ってもよい。この一文はもともと1950年の旅に関する記述だが、それに11年先立つ台湾鉄道（客船）旅行記として、世に出たのが本書である。

1939年当時の台湾は言うまでもなく「砂糖の島」で、日本の製糖会社も台湾に多くの工場を持っていた。内田の中学の先輩（中川蕃）もまた社員として台湾に赴任し、内田を台湾に誘った。内田は当時、日本郵船嘱託であったため、とくに用事もないままに、郵船・大和丸で台湾へ渡った。すでに日中戦争が勃発し、さらなる戦争に向けた「時局」ではあったが、内田の筆致はあくまでも明るく洒脱だ（神風号の飯沼正明飛行士の戦死には言及するものの）。内田は食にもこだわりがあり、台湾の人々さえトライしようとしない食べ物にも箸をつけようと試みる。そうした周囲の人々とのギャップもまた見ものである。内田は物見遊山のような旅を嫌い、あれこれと見回ることもなく、何もしないことを至上とする。本書には当時の観光地はほとんど登場しない一方、汽車に乗り、用事もないのに当時の台湾鉄道最南端である溪州へ行き、「小便」だけしてそのまま折り返している。それでいて内田の観察には驚かされる。寝台車の構造や蚊帳のこと、船とカレー、蕃子田線と本社前駅。いまから80年も前の台湾旅の様子は、いまと大きく変わっているようにも見える。ではどこが変わっていないだろうか。

近年の中公文庫からは、内田だけでなく、林芙美子や佐藤春夫の台湾随筆・小説集も刊行されている。やや時代は異なるものの、およそ100年前の台湾旅を知ることができる貴重な作品集で、あわせて読めば視点や興味の違いを深く知ることができるだろう。

『台湾一周!!
途中下車、美味しい旅』

光瀬憲子

双葉文庫　2020年　￥770
ISBN：9784575714845

内田百閒の旅がとくに目的のないものであったとすれば、本書の目的は表題にもあるように、「美味」である。本書の取材が行なわれたのは2019年11月。内田の旅から80年を経ている。その間、旅の様子は大きく変わった。船と鉄道を利用し、物物しげであったかつての旅は、ローコストキャリア（LCC）と鉄道、そしてネットをフル活用、軽快に進む。気軽に降りたい駅やおすすめの駅で途中下車、airbnbで宿探し。まさに現代の台湾旅だ。

筆者の光瀬憲子氏は、台湾在住経験7年の大ベテラン。旅行経験はもちろん、台湾人の知人友人も多い。気軽に店員や鉄道員、知人に現地のおすすめを取材していく。そのさまは読んでいて心地よい。

本書は、慣れた旅人によってテンポよく展開される7泊8日の鉄道旅行記である。筆者はLCCで高雄空港から台湾入りし、鉄道で北上。台南、台中、新竹、台北、花蓮、台東、高雄と各地で1泊を重ねながら鉄道で台湾を一周し、再び高雄から日本へ、というルートである。この旅のおともに選ばれたのが台湾鉄道で、西部・東部幹線だけでなく、内湾線や旧山線（廃線跡）にも寄り道している。

本書は強烈な旅情を誘うというより、実用的な台湾ローカル美食のガイドブックのようであり、エッセイとはまた異なる味わいがある。観光客が素通りする小駅でもふらりと下車、食べ歩き、逐次その情報が記載されていく。ときには失敗も描かれる。ガイドブックサイズではなく文庫サイズで、ポケットに忍ばせるにも都合がいい。これを持って旅に出れば、心強いガイドがついている気にさえさせてくれる。寄り添い、寄り添える。

筆者は「車窓というスクリーンに映される風景は、旅のスピード感をリアルに伝え、次の土地への期待感を盛り上げてくれる」と語る。いまや目的地に「直行」しない列車の旅は、土地ごとの違いと変化を空気とともに感じさせる貴重な存在となっている。現代だからこそ、目的を決めすぎない途中下車の旅が楽しめる。そう思える1冊。

『最新版 台湾鉄道旅行』
客車列車が絶滅寸前！
いまが最後のチャンスだ！

イカロス出版　2019年　￥1,870
ISBN：9784802207386

本書は、2022年時点でもっとも新しく、詳細な台湾の鉄道ガイドブックだ。台湾の鉄道ガイドと言えば長らく、JTBキャンブックスから発行されているものがもっとも手軽だった。しかし、片倉佳史氏版でも発行から10年以上が経ち、その間にも台湾の鉄道は進歩を遂げ、内容のアップデートは必須だった。本書は路線や車両、駅、きっぷ、模型、そして駅弁にいたるまで、台湾の鉄道に関する基本的な情報がすべて網羅されている。まさに台湾鉄道旅には必携の内容と言える。

台湾では、高速鉄道や地下鉄、ライトレール（路面電車）の建設が進み、鉄道も大きな変化を迎えている。と同時に、日本から見れば懐かしの客車列車や貨物列車もまだまだ現役で、それを目当てに台湾へ向かう人も少なくない。地方にはかつて産業用に利用されていた阿里山森林鉄道や製糖工場用の鉄道（渓湖、蒜頭、新營糖廠など）も保存される形で観光用に活用されている。本書では、こうした日本から見て珍しい台湾の鉄道情報について、写真撮影にも有用なスポットや移動手段（飛行機やバス、レンタサイクルやレンタバイクまで）まで取り上げられており、かゆいところに手が届く。

執筆陣は、結解喜幸、峰雪剛、山崎勉氏ら、台湾以外の鉄道にも詳しいライターらで、鉄道ファンの知りたい、見たいツボを熟知している。虎尾糖廠、台中港線、花蓮臨港線、中興一号特種支線など「おっ」という路線の情報はえがたい。

すでに2年以上前の情報だが、基本的なものは現在も変わっていない。ただし、南廻線は2020年末の電化によって、沿線風景や列車の運行状況に大きな変化が生じていることに注意が必要だ。人気が高い「普快車」も、ダイヤ改正で一般列車としてその運行を終えたが、現在はツアー列車「藍皮解憂号」として再出発した。ご乗車にはご予約を忘れずに！

『帝国日本の観光』
政策・鉄道・外地

千住 一、老川慶喜・編著

日本経済評論社　2022年　￥5,390
ISBN：9784818826069

本書は、政策・鉄道・外地という3つの角度から、旧植民地を含んだ近代日本における観光のありかたを明らかにしたものである。本書は研究者による共同研究をもとに執筆され、10篇の論文が収録されている。その中には、日本国内だけでなく、台湾、朝鮮、満洲、そして山東の鉄道、観光政策・事業が論じられている。これまで個別の論文や著作で論じられてきた観光の歴史学的研究が、本書は1冊で、旧植民地を含む日本全国について横断的に見ていくことができる。それ自体が貴重な成果と言える。

著者のひとりである千住一氏が指摘しているように、観光という行為や出来事は移動と不可分の関係にあり、とくに近代日本では鉄道と深い関係がある。それは台湾も同様である。とくに、台湾の場合、単に「移動」だけでなく、いかに「台湾」のイメージをつくり出したかにも鉄道が大きくかかわっている。

インターネットもテレビも、電話さえろくになかった時代に、人々はいかに旅の情報をえて、旅に出たのか。その重要な情報源になったのが、旅行ガイドブックである。日本統治時代の台湾でも多くのガイドが発行されたが、その中心となったのは「台湾鉄道旅行案内」だろう。第7章の曽山毅氏による「日本統治期台湾の『視察・観光対象』」では、この旅行案内を中心として、当時発行されたガイドを分析している。日本では、史跡や寺社仏閣、景勝地が観光地に選ばれるが、「台湾鉄道旅行案内」では日本によって建設された施設がその中心となり、「日本統治の成果を強調する」情報が提示されているという。曽山氏は、こうした状況を、植民地統治という文脈のもとで沿線の空間が再編されたと解釈している。旅行ガイドにどこを選び、どこを選ばないのか。それひとつを取っても、描き出したい、見せたい土地の姿が浮かび上がってくる。こうした観点から、あらためて現代の旅行ガイドを見直してみるのもおもしろいかもしれない。

メトロ
MRTと鉄道に乗って
『週末台湾旅』

山田やすよ

エクスナレッジ　2019年　￥1,760
ISBN：9784767826295

台湾観光といえば台北が定番だが、鉄道を使って足を延ばすと、たくさんの絶景観光スポットが待っている。かわいい古都「台南」、夜のランタンが絶景の「十份」、猫村として注目の「猴硐」、独自の文化が香る「美濃」など、縦横無尽に張りめぐらされたメトロ＝MRT、台湾新幹線、ローカル鉄道を効率よく使って回るベストルートを紹介。エリアを絞った台湾ガイドが多い中、3～4泊で台湾全域をよくばりに楽しむ方法を紹介する。

『台湾“駅弁＆駅麺”食べつくし紀行』

鈴木弘毅

イカロス出版　2020年　￥1,320
ISBN：9784802208758

かつて日本による統治が行なわれていた台湾。鉄道の多くはその時代に敷かれ、当時の日本文化がおおいに反映されている。どこか懐かしい雰囲気を求め日本から訪れる人も多いが、その懐かしさは駅弁など駅グルメも同様だということをご存じだろうか。日本の鉄道系グルメ研究の第一人者が、駅弁と駅麺を求めて台湾を一周。その実態を紹介しつつ、日本との違い、共通点を明らかにしていく。日本の鉄道ファンも必見、台湾鉄道グルメ考察本。

『愉快なる地図』
台湾・樺太・パリへ

林 芙美子

中公文庫　2022年　￥990
ISBN：9784122072008

「どこへ行くにも、棺桶の仕度なンかいらないじゃないのと、無鉄砲な旅ばかりしていました」。1930年、総督府に招かれた台湾への旅から、『放浪記』の印税をつぎ込んでひとりで旅した満洲、そしてシベリア鉄道でのパリへの旅――。肩の張らない3等列車のひとり旅を最上とした、林芙美子の若き日の紀行を集成。

『台湾、ローカル線、そして荷風』

川本三郎

平凡社　2019年　￥1,980
ISBN：9784582837971

ひとりローカル線に乗って、降りたことのない小さな町を訪ねること。老いてから夢中になった台湾と、出会った人たちとの交流のこと。そして深まりゆく、荷風への思い――。ひとり迎えた老年の日々の、「豊かな孤独」を綴る。雑誌『東京人』の連載を書籍化した1冊。

『秘湯めぐりと秘境駅』
旅は秘境駅「跡」から台湾・韓国へ

牛山隆信

実業之日本社文庫　2019年　￥858
ISBN：9784408554594

「秘境駅」の名づけ親が挑む新たな冒険と、展開される非日常、全9編。山奥深くにひっそりと湧く秘湯、本格的な登山、キャンピングカー、廃止された秘境駅から海外（台湾・韓国）の秘境駅まで、秘境駅探訪家・牛山隆信が9つの秘湯＋鉄道の旅を綴る。「日常を飛び出せば冒険になる！」。工夫を重ねて旅を、冒険をつくり出す著者の真髄、ここにあり。

『台湾に残る日本鉄道遺産』
今も息づく日本統治時代の遺構

片倉佳史

交通新聞社新書　2012年　￥880
ISBN：9784330269122

台湾の鉄道の大半が日本統治時代に整備されたことは現地でも広く知られている。最近では、民主化と経済発展の進行で、かつてはタブー視されていた郷土研究も花開き、鉄道文化についての関心も日本と同様に高まってきた。台湾在住の著者による徹底した現地取材で、日本統治時代に建設されたターミナル建築や木造駅舎などの「鉄道遺産」をクローズアップ。巻末に「台湾の鉄道遺産一覧」を収録。

『コレクション・台湾のモダニズム』
第3巻　台湾縦貫鉄道と交通網

蔡 龍保・編

ゆまに書房　2020年　￥19,800
ISBN：9784843355404

渡部慶之進『台湾鉄道読本――鉄道現業読本16』（春秋社、1939年）、森重秋陽『台湾鉄道小史』（台湾交通協会、1943年）、羽生国彦『台湾の交通を語る』（台湾交通問題調査研究会、台湾運輸業組合、1937年）などをはじめ、「台湾縦貫鉄道と交通網」をテーマにしたエッセイ、関連年表を収録。

『開拓鉄道に乗せたメッセージ』
鉄道院副総裁
長谷川謹介の生涯

中濱武彦

冨山房インターナショナル
2016年　￥3,850
ISBN：9784866000213

日本の黎明期に創意工夫の限りを尽くし、日本各地に、台湾に、中国に鉄路を延ばしていった鉄道技師。地域開発、産業と雇用の創出という開拓鉄道建設の理念を、開拓への熱き心、不合理に挑む心、普遍的な人間愛をもって実現させた長谷川謹介生涯の記録。

旅行ガイドブックから
読み解く
『明治・大正・昭和日本人のアジア観光』

小牟田哲彦

草思社　2019年　￥2,640
ISBN：9784794224026

昔はアジア旅行もおおらかであり、日露戦争後になると東アジアを旅する人が増え、各種旅行ガイドブックも多く刊行された。読み捨てられたそれらのガイドブックを古本で集め、丹念に読み解く作業を続けると、歴史のリアルな実相が見えてくる。鉄道や旅行の歴史に詳しい著者が、時刻表や路線図などを駆使して、昔のアジア旅行の実態を検証。朝鮮・満洲・中国・台湾の激変する歴史を旅行という観点から見直した、稀有な論考書。

『地図で読み解く日本統治下の台湾』

陸 傳傑／河本尚枝・訳

創元社　2019年　￥5,500
ISBN：9784422202730

詳細な市街図をはじめ、鉄道や道路・航路などのインフラ、精糖や樟脳などの産業用地、先住の山岳民族の村々や行政区画など、さまざまな主題で描かれた貴重な地図と、資料的価値の高い多数の写真を含む180点以上の図版を収録。歴史地図をとおして大日本帝国の台湾統治のありようと、現在まで続くその影響を読み解き、考察する一書。

『路』

吉田修一

文春文庫　2015年　￥792
ISBN：9784167903572

台湾に日本の新幹線が走る。商社の台湾支局に勤める春香と日本で働く建築家・人豪のめぐり逢い、台湾で生まれ戦後引き揚げた老人の後悔、「今」を謳歌する台湾人青年の日常――。新幹線事業を背景に、日台の人々の国を越え時間を越えてつながる想いを色鮮やかに描く。台湾でも大きな話題を呼び人気を博した著者渾身の感動傑作。

『十津川警部　愛と絶望の台湾新幹線』

西村京太郎

講談社文庫　2019年　￥682
ISBN：9784065171462

幼少期に父母と暮らした台湾へ向かう前日、中華料理店の女将・戸田一子が殺された。十津川警部は台湾から一子に届いた台湾新幹線のチケットに着目するが、捜査の進展を待たずに一子の娘・二三子が突如、台湾へ。事件の鍵は台湾にあるとにらんだ十津川警部も渡航するが、入国早々「日本へ帰れ」という脅迫が。二三子はどこに。脅迫者は誰なのか。台湾を縦断する新幹線を舞台に、十津川たちを次々と試練が襲う。